## F.fragments for piano and accordion (2012)

F.フラグメンツ

委嘱:廻由美子&シュテファン・フッソング デュオ

世界初演:2012年11月3日 テッセラの秋音楽祭(サロン・テッセラ、東京)

ピアノとアコーディオン、この発音体の異なる2楽器の組み合わせに、私は何の違和感もなく、双方の音楽的、技術的な可能性に野心的に挑んだ。その結果、演奏者には高度なテクニックと全方向的な聴取能力を、一瞬の隙もないレヴェルで要求することになった。この点では普段と変わらないが、これまでの作曲とは全く異なる点が1つある。それは、私自身、直接の面識がない人々、行ったことのない土地、そこで流れた時間を、覚醒して意識的に、この11の断片的楽章に記憶しようと試みたことである。

第1曲"Twin Leaves" では、そのタイトルが暗喩するとおり、とある町が(その町歌を引用するという方法で)永遠に記憶される。一体、どれだけの人々が自分の町を去らねばならなかったのだろう? 第2曲"Speedy" では、演奏技能の極限に挑んでいる。古典音楽を演奏するための技能は120%必須だが、それだけでは演奏出来ない。慣習だけでは立ち行かない聴き方と拍の数え方を演奏者に要求し、動物的な感覚で双方が瞬時反応するそのスピードは極限に達している。'Speedy' はまた、日本人にとって忘れ難い、使われなかった「警報システム」の名称である(一体どれだけの人々が、行くべきでない方向へと向かっただろうか?)。第3曲 "Noise "それはずっと存在していた。長い長い年月。そして今ようやく気付かれ始めた。第4曲 "Fall Time Blues "むかし日本で発禁になった、ある音楽の記憶。願いは空しく、日本は第5の季節を迎えてしまった。

第5曲 "Pray for 18537?+2654?" 一体、どれだけの命が失われたのだろう?

第6曲 "Vertical" 作曲上のアイデアの一つ(楽器の特性を相互転用して新たな響きや楽器間の関係を実現する)。とりわけアコーディオンには苦手と知られている垂直的な表現を試みた。第7曲 "Points" Takashi Hirose氏へのオマージュ。カッサンドラ?人並み外れた感性と知性が、警鐘を鳴らし続け、今も続く。この断片の後半部分は、二人の奏者が互いを集中して聴くことでしか音を発することができない『管理された即興』である。 第8曲 "Alert "ある学者へのオマージュ。本心とは遠くかけ離れた表現で、良くも悪くも人々を刺激する。第9曲 "BONE "核心の本質は何か。虚飾を全て捨て去ること。私自身の創作上のテーマでもある。第10曲 "Try to Fly "Ryuichi Hirokawa氏へのオマージュ。人間には不可能なことがある。向き合い受け入れ、それでも出来ることは何か?を探す。第11曲 "(no title)"では、この作曲の動機となった人々の名の、ローマ字表記から音組織を構成した。2楽器は別々の時間を有し、複層的に進行する。途中何度か、双方が注意深く耳を澄ますことによる、絶妙なバランスでの響きを要求しているが、その他は2楽器が独立して進むため、演奏の度に異なる結果となる。

ここに、私がこの音楽を作曲する動機となった人々の名を記す。『F.フラグメンツ』の作曲は、これら、善意の人々の存在に感銘を受けたことが動機となった。

Takashi Hirose (novelist, journalist), Ryuichi Hirokawa (photo journalist),

Hiroaki Koide (Assistant Professor at Research Reactor Institute, Kyoto Univ.) Yasumi Iwakami (journalist/ IWJ), Jinzaburo Takagi (Dr., Nuclear Chemist), Mitsuhiko Tanaka (Science writer), Ayumu Yasutomi (Prof. Ph.D. at The Univ.of Tokyo),

And Yoshishige Yoshida (film director)

総ての断片的楽章は、それぞれ固有の音楽的身振りを持ち、演奏者の演奏に際する内的状況をヴァリエーションしている。これにより意図的に、演奏者たちを慣習的な身体と脳の使い方から逸脱させる。私は作品の実演のために(今の時代においても)生身の演奏家という音楽の媒体を意識的に選択している。この媒体そのものの内的状況が慣習とは異なる状況に置かれることなしに、音楽がどんなに新奇で魅惑的な響きに満ちていても、新たな力や可能性を、聴く人に喚起させることはない、という考えに基づいて作曲している。

「純粋なものは直ぐに、派手なものや汚れたものの陰になってしまうから、私はこの最も素朴で目立ちにくい、小さくて可憐な花を前面に立てる」そう言って笑った、故・岡田幸三先生(花人、福島県喜多方市出身)の、室町時代からの伝統を受継ぐ、質素ながら凛とした美しさを湛えた立花を思い出す。あれは2005年3月、桜蕾の季節だった。私の中で音楽と花が初めて出会った瞬間だった。先生の言葉と花を思い出しながら人間の善意について考える。そして、この絶望的な未来に、一抹の希望を残してくれる人々の存在に感謝し、音楽に記憶し、未来に捧げたい。

(2013/9/17 Tokyo)